P－40

小児患者を対象とした訪問看護を行う看護師が心がけていることー在宅移行期を中心としてー

上原文哉[1)]、稲垣千文[2)]
1) 総合南東北病院 看護部手術室
2) 新潟医療福祉大学 看護学科

【背景・目的】現在の日本は少子高齢化社会である。しかし、15 歳未満の小児患者数（外来）は 2005 年約 63 万人、2011 年約 68 万人と増加傾向にある。さらに小児に対する医療の高度化による退院の遅延に起因する入院者数の増加が問題となっており、小児患者の在宅医療への移行推進が求められている。訪問看護の利用者は圧倒的に高齢者の割合が高く、小児の利用者数は全体の約 0.9%と少数である。これは小児を対象とした訪問看護提供施設が少ないことや、小児の利用者の割合が少ないため看護師の小児に対する訪問看護の経験が成人や高齢者と比較して少ないことも一因である。また、小児は在宅での医療的ケアニーズが非常に高いことや、親の看護師に対するニーズの水準も高いことから、看護介入そのものが困難となる場合も多い。

本研究は、現在支援を行うことに困難を感じている看護師や、これから小児訪問看護を担おうとする看護師への支援の一助となると考え、訪問看護師が小児患者と接する際に心がけていることを明らかにすることを目的とした。

【方法】小児専門以外の訪問看護ステーションで小児（15 歳未満）訪問看護を行い、専門および認定の資格を得ていない看護師 1 名を対象とした。データ収集は、インタビューガイドを用いた半構成面接を行い、時間は 30 分程度とした。さらに、インタビュー内容をデータとし分析を行った。なお、本研究は、新潟医療福祉大学倫理審査委員会の承認を受けて行った。

【結果】研究協力者は、女性看護師である（以下 B さんと示す）。B さんの訪問看護在職年数は 4 年 11 か月、看護師勤務経験年数は、約 28 年であった。インタビュー当時の B さんの訪問看護の件数は、週に延べ 20 件であり、小児訪問は週に 1 件であった。なお、インタビュー時間は 34 分 48 秒であった。

分析の結果、小児患者を対象とした訪問看護を行う看護師が心がけていることとして、退院前では【退院前より児の疾患についての学習を行う】、【退院前より児についての情報収集を行う】、退院後では【児の母親との関係性の構築をする】、【急変しやすいため注意して観察を行う】、【細かい対応方法を母親に伝える】、【親の不在時の児の様子を親に細かく伝える】、【児の母親との関係性を見極めた上で医療処置を提案する】、【児の母親の力量をアセスメントする】、【助産師との連携を図る】の 9 つのコードを抽出した。

表１　コード及び対象者の語り（データ）について

コード	データ
【退院前より児の疾患についての学習を行う】	「退院するまでの時期ですよね．うんとー・・・私たちが心がけていることとしては，小児の場合って難しい疾患が多いので，疾患についてちょっと病気について調べたりはします．疾患の勉強ですね．」
【退院前より児についての情報収集を行う】	「（前略）あとは，えっと退院が決まったらだいたいカンファレンスがあるのですが，入院中のカンファレンス小児はだいたいカンファレンスがあるので，そのところに参加できれば参加をして小児は医師からの説明があるのでそこから情報収集をしたりとか入院時の情報はサマリーから得たりっていうことはします．」 「状態の安定さがあるかどうかですね．あとはそれこそ，医療機器がどの程度ついているかとか在宅酸素をしているかとか，胃瘻とか あ，胃瘻はないですね．経鼻チューブが入ってるとか気管切開をしているかとか，そういう情報がやっぱり1番あれですかね．今，腹膜透析をしている子がいて，そういうところもやっぱり今現在している治療が1番やっぱり気になるところですかね．」
【児の母親との関係性を構築する】	「結局，小児の場合は家に帰ってきたらお母さんがメインとなるので，できればお母さんとの関係性を築いていかないといけませんので，お母さんの話をよく聞いて傾聴したり，あとはお母さんの結局病院で指導されてきたことに対して絶対拒否的なことは言わず，そのやり方に共感して進めていったりっていうことは心がけてやっています．」
【急変しやすいため注意して観察を行う】 【細かい対応方法を母親に伝える】 【親の不在時の児の様子を親に細かく伝える】	「成人や高齢者と小児で何が違うかとなったら多分，小児は割と急変しやすいので状態が不安定なので，観察も注意してですけど早めの受診やら細かいこともお母さんたちには伝えるようにはしています．訪問すると結構レスパイト的な訪問が小児は多いので訪問中はお父さんお母さんは出かけてしまうという感じなのでその間どんなことがあったかっていう細かい事とかはお伝えするようにはしています．成人，高齢者はちょっとアレで大丈夫かって言うと数日様子を見て良いような成人とか高齢者は緊急を要しない場合も多いのでそこら辺は違った目で見て対応はしています．」
【児の母親との関係性を見極めた上で医療処置を提案する】	「（前略）なので最初の段階はちょっとここ違うかなと言う所とかあっても絶対それが問題でなければそのまま見守るようにしておいてだんだん関係性が出てきた時点でこれはこうした方がいいですよとかそういう所ではしたりはしますしそうなると関係性が出てくるとママ達の方からもこれってこうでいいんですかねとママの方から言われるようになると関係性がちょっとできてきたのかなと言う気は，頼られているとゆうかそういうのは出てくると思います．そうでなければ最初の段階ではこうしてくださいああしてくださいと言って指示を出して，それで終わりって言うのは最初の方にはやっぱりあるので・・・．」
【児の母親の力量をアセスメントする】	「あ，私がですか？そうですね，ママの性格がそれぞれなので，やれる内容が，ここまではこのママはできるかなとか，ちょっとこのママには負担があるかなっていうのはちょっとみたりとか，細かいというか性格とかも見ながらやったりはします．あと大体，兄弟が他にいるので，兄弟がいる上に1人の子にすごく手をかけるってのは実際難しいし，愛情面もちょっと考えてあげなきゃいけないのでほんと難しそうなものというかやれる範囲のもののやり方を選んでは指導してはいます．」
【助産師との連携を図る】	「そうですねー・・・いまうちが入っているところは入院中も結局あまり協力的じゃなく医療者に対してとか看護師さんに対して拒否的な態度をとり，結局訪問看護も入らず退院してきて，ほんとに世間あんまりてゆうかもう孤立したような感じになり，助産師さんが動いたんです．はい．これではダメだと言うことで助産師が訪問して動いて結局家の訪問がそこの両親としてはオーケーが出ていないのですけれどとりあえず会ってくださいと言うことで訪問に入って，今現在ずっと訪問しております．やっぱり，障害の子供を見せたくない部分もあるのか，自分でできると思い抱え込んでしまうのか，そこはちょっとママの性格もわからないんですけれど，やはりそういう社会のアレとはつながらなくてもいいような考えの方もいたので．ママは看護師さんなんですけど．」

【考察】本研究では、児の母親に関するコードが多数抽出された。小児は、医療処置を他者に依存している状況や愛着形成の段階であることから、児と母親の関わりは必要不可欠であると推測される。そのため、小児を対象とする訪問看護では成人や高齢者の訪問看護と比較して、療養者だけでなくその家族に対しての関わりも重要であると考えられる。これらのことより、小児を対象とする訪問看護を行う際には、小児を注意深く観察することなども重要であるが、児の母親との関係を構築したり母親の負担や力量を考慮したりすることも児の効果的なケアに繋がると思われる。

【結論】小児患者を対象とした訪問看護を行う看護師が心がけていることとして、の 9 つのコードが抽出された。小児患者を対象とした訪問看護を行う際には、児に対しては、疾患や状態の安定度などの把握を行うこと、児の母親に対しては、母親との関係性を築くことに重点を置いたりそれぞれの母親の負担などを考慮して指導内容を変えたりすること、また、助産師などの他職種と連携を図ることが必要であると示唆された。